

奇怪な再会

芥川龍之介

青空文庫

お蓮^{れん}が本所^{ほんじょ}の横網^{よこあみ}に囲われたのは、明治二十八年の初冬^{はつふゆ}だつた。

妾宅^{おくらばし}は御蔵橋^{おくらばし}の川に臨んだ、極^{ごく}く手狭^{ていさ}な平家^{ひらや}だつた。ただ庭先^{おたけ}から川向うを見ると、今は両国^{りやうごく}停車場^{ていしやじやう}になつてゐる。御竹倉^{おたけ}一帯^{ぐら}の藪^{やぶ}や林^{りん}が、時雨^{しぐれ}勝^{がち}な空を遮つていたから、比較的^{ひかくてき}町中^{まちなか}らしくない、閑静^{かんせい}な眺めには乏^{ひな}しくなかつた。が、それだけにまた旦那^{だんな}が来ない夜^よなぞは寂^{さび}し過ぎる事も度々あつた。

「婆や、あれは何の声だろう？」

「あれでございますか？ あれは五位ごいさぎ鷺でございますよ。」

お蓮は眼の悪い傭やとい婆さんとランプの火を守りながら、気味悪そうにこんな会話を交換する事もないではなかった。

旦那の牧野まきのは三日にあげず、昼間でも役所の帰り途に、陸軍りくぐんいつとうしゆけい一等主計の軍服を着た、逞たくましい姿を運んで来た。勿論もちろん日が

暮れてから、厩うまや橋ばし向うの本宅を抜けて来る事も稀ではなかつ

た。牧野はもう女房ばかりか、男女なんによ二人の子持ちでもあつた。

この頃丸まるまげ髻ゆに結つたお蓮は、ほとんど宵よいご毎に長火鉢を隔てながら、牧野の酒の相手をした。二人の間の茶ぶ台には、大抵たいていからすみや海鼠このわた腸が、小綺麗な皿小鉢を並べていた。

そう云う時には過去の生活が、とかくお蓮の頭の中に、はつき

り浮んで来勝ちだった。彼女はあの賑やかな家や朋輩ほうばいたちの顔を思い出すと、遠い他国へ流れて来た彼女自身の便りなさが、一層心に沁しみるような気がした。それからまた以前よりも、ますます肥ふとつて来た牧野の体が、不意に妙な憎悪ぞうおの念を燃え立たせる事も時々あった。

牧野は始終愉快そうに、ちびちび杯さかずきなを嘗めていた。そうして何か冗談じょうだんを云つては、お蓮の顔を覗のぞきこむと、突然大声に笑い出すのが、この男の酒癖さけくせの一つだった。

「いかがですか。お蓮の方かた、東京も満更まんぎらじやありませんまい。」
お蓮は牧野にこう云われても、大抵は微笑を洩もらしたまま、酒の爛かんなどに気をつけていた。

役所の勤めを抱えていた牧野は、滅多に泊つて行かなかつた。

枕もとに置いた時計の針が、十二時近くなつたのを見ると、彼はすぐにメリヤスの襯衣へ、太い腕を通し始めた。お蓮は自堕落な立て膝をしたなり、いつもただぼんやりと、せわしなそうな牧野の帰り仕度へ、^{ものう}懶い流し眼を送っていた。

「おい、羽織をとつてくれ。」

牧野は夜中のランプの光に、^{よなか}脂の浮いた顔を照させながら、もどかしそうな声を出す事もあつた。

お蓮は彼を送り出すと、ほとんど毎夜の事ながら、気疲れを感じずにはいられなかつた。と同時にまた独りになつた事が、多少は寂しくも思われるのだつた。

雨が降っても、風が吹いても、川一つ隔てた藪や林は、心細い響を立て易かった。お蓮は酒臭い夜着よぎの襟に、冷たい頬ほおを埋めながら、じつとその響に聞き入っていた。こうしている内に彼女の眼には、いつか涙が一ぱいに漂って来る事があった。しかしふだんは重苦しい眠が、——それ自身悪夢のような眠が、間まもなく彼女の心の上へ、昏々こんこんと下くだつて来るのだった。

二

「どうしたんですよ？ その傷は。」

ある静かな雨降りの夜よ、お蓮れんは牧野まきのの酌しやくをしながら、彼の右の

頬へ眼をやった。そこには青い剃痕そりあとの中に、大きな蚯蚓みみずばれ脹はが
出来ていた。

「これか？　これは鼻かかあに引ひつ搔かかれたのさ。」

牧野は冗談かと思うほど、顔色かおいろも声もけろりとしていた。

「まあ、嫌きらな御新造ごしんぞだ。どうしてまたそんな事をしたんです？」

「どうしてもこうしてもあるものか。御定おさだまりの角つのをはやしたの

さ。おれでさえこのくらいだから、お前まへなぞが遇あつて見ろ。たち

まち喉笛のどぶえへ噛かみつかれるぜ。まず早い話が満洲犬まんしゅうけんさ。」

お蓮はくすくす笑い出した。

「笑い事じゃないぜ。ここにいる事が知れた日にや、明日あしたにも押
しかけて来ないものじゃない。」

牧野の言葉には思いのほか、真面目まじめそうな調子も交まじっていた。

「そうしたら、その時の事ですわ。」

「へええ、ひどくまた度胸どきようが好いいいな。」

「度胸が好い訳じゃないんです。私わたしの国の人間は、——」

お蓮は考え深そうに、長火鉢すみびの炭火へ眼を落した。

「私の国の人間は、みんな諦めあきらめが好いんです。」

「じやお前は焼かないと云う訳か？」

牧野の眼にはちよいとの間あいだ、狡猾こうかつそうな表情が浮んだ。

「おれの国の人間は、みんな焼くよ。就なかんずく中おれなんぞは、——

——

そこへ婆さんが勝手から、あつらえ物の蒲焼かばやきを運んで来た。

その晩牧野は久しぶりに、妾宅へ泊って行く事になった。

雨は彼等が床へはいつてから、霽の音に変わり出した。お蓮は牧

野が寝入った後、何故かいつまでも眠られなかった。彼女の冴え

た眼の底には、見た事のない牧野の妻が、いろいろな姿を浮べた

りした。が、彼女は同情は勿論、憎悪も嫉妬も感じなかった。た

だその想像に伴うのは、多少の好奇心ばかりだった。どう云う夫

婦喧嘩をするのかしら。——お蓮は戸の外の藪や林が、霽にざわ

めくのを気にしながら、真面目にそんな事も考えて見た。

それでも二時を聞いてしまうと、ようやく眠気がきざして来た。

——お蓮はいつか大勢の旅客と、薄暗い船室に乗り合っている。

円い窓から外を見ると、黒い波の重なった向うに、月だか太陽だ

か判然しない、妙に赤^{あか}光^{びかり}のする球^{たま}があつた。乗合いの連中はどうした訳か、皆影の中に坐つたまま、一人も口を開くものがない。お蓮はだんだんこの沈黙^{うしろ}が、恐いような気がし出した。その内に誰かが彼女の後^{うしろ}へ、歩み寄つたらしいけはいがする。彼女は思わず振り向いた。すると後には別れた男が、悲しそうな微笑を浮べながら、じつと彼女を見下している。……

「金^{きん}さん。」

お蓮は彼女自身の声に、明^あけ方の眠から覺まされた。牧野はやはり彼女の隣に、静かな呼吸を続けていたが、こちらへ背中を向けた彼が、實際寢入っていたのかどうか、それはお蓮にはわからなかった。

三

お蓮^{れん}に男のあつた事は、牧野^{まきの}も気がついてはいたらしかった。が、彼はそう云う事には、頓^{とん}着^{ちやく}する気色^{けしき}も見せなかつた。また實際男の方でも、牧野が彼女にのぼせ出すと同時に、ぱったり遠のいてしまったから、彼が嫉妬^{しつと}を感じなかつたのも、自然と云えば自然だつた。

しかしお蓮の頭の中には、始終男の事があつた。それは恋しいと云うよりも、もつと残酷^{ざんこく}な感情だつた。何故^{なぜ}男が彼女の所へ、突然足踏みもしくなつたか、——その訳が彼女には呑みこめな

かつた。勿論お蓮は何度となく、変り易い世間の男心に、一切の
 原因を見出そうとした。が、男の来なくなつた前後の事情を考え
 ると、あながちそうばかりも、思われなかつた。と云つて何か男
 ほうの方に、やむを得ない事情が起つたとしても、それも知らさず
 別れるには、彼等二人の間柄は、余りに深い馴染みだつた。では
 男の身の上に、不慮の大変でも襲つて来たのか、——お蓮はこう
 想像するのが、恐しくもあれば望ましくもあつた。……

男の夢を見た二三日後、のちお蓮は銭湯せんとうに行つた歸りに、ふと
 「身みの上判断うえはん、玄象道人げんしようどうじん」と云う旗が、ある格子戸造りの
 家に出してあるのが眼に止まつた。その旗は算木さんぎを染め出す代り
 に、赤い穴あな銭せんの形を描かいた、余り見慣れない代物しろものだつた。が、

お蓮はそこを通りかかると、急にこの玄象道人に、男が昨今どうしているか、占つて貰おうと云う氣になった。

案内に應じて通されたのは、日当りの好い座敷だった。その上主人が風流なのか、支那の書棚だの蘭の鉢だの、煎茶家めいた装飾があるのも、居心の好い空氣をつくっていた。

玄象道人は頭を剃つた、恰幅の好い老人だった。が、金歯を嵌めていたり、巻煙草をすばすばやる所は、一向道人らしくもない、下品な風采を具えていた。お蓮はこの老人の前に、彼女には去年行方知れずになった親戚のものが一人ある、その行方を占つて頂きたいと云つた。

すると老人は座敷の隅から、早速二人のまん中へ、紫檀の小机

を持ち出した。そうしてその机の上へ、恭しうやうやそうに青磁せいじの香炉こうろや金欄きんらんの袋を並べ立てた。

「その御親戚は御幾おいくつですな？」

お蓮は男の年を答えた。

「ははあ、まだ御若いな、御若い内はとかく間違いが起りたがる。
手前てまえのような老爺おやじになつては、——」

玄象道人はじろりとお蓮を見ると、二三度下げびた笑い声を出した。

「御生れ年も御存知かな？ いや、よろしい、卯うのいっぱく一ぱく白ぱくになります。
ます。」

老人は金欄の袋から、穴あな銭せんを三枚取り出した。穴銭は皆一枚

ずつ、薄赤い絹に包んであつた。

「私の占いは擲錢トと云います。擲錢トは昔漢の京房が、始めて筮に代えて行つたとある。御承知でもあらうが、筮と云う物は、一爻に三變の次第があり、一卦に十八變の法があるから、容易に吉凶を判じ難い。そこはこの擲錢トの長所でな、……」

そう云う内に香炉からは、道人の燻べた香の煙が、明い座敷の中に上り始めた。

四

道人は薄赤い絹を解いて、香炉の煙に一枚ずつ、中の穴錢

を燻くんじた後のち、今度は床とこに懸しけた軸じくの前へ、丁寧ていねいに円まるい頭あたまを下くだげた。軸じくは狩野派かのうはが描かいたらしい、伏羲ふくぎ文王ぶんおう周公しゅうこう孔子こうしの四大聖人の画像えきざうだった。

「惟これ皇こうたる上じょう帝てい、宇宙うちゅうの神聖しんせい、この宝香ほうかうを聞きいて、願ねがくは降臨かうりんを賜たまえ。——猶ゆう予よ未みだ決けつせず、疑ぎう所しよは神靈しんれいに質ただす。請こう、皇こう愍びんを垂すれて、速すみに吉凶ききうを示しし給たまえ。」

そんな祭文さいもんが終はつてから、道人だうじんは紫檀したんの小机せうきの上へ、ぱらりと三枚の穴銭あなせんを撒まいた。穴銭あなせんは一枚は文字もじが出たが、跡あとの二枚は波なみの方はただった。道人だうじんはすぐに筆ふでを執とつて、巻紙まきしにその順序しゆりを写うつした。

銭ぜにを擲なげては陰陽いんようを定さだめる、——それがちようど六度りくど続ついた。

お蓮れんはその穴錢の順序へ、心配そうな眼を注そそいでいた。

「さて——と。」

擲てき錢せんが終った時、老人は卷紙まきがみを眺めたまま、しばらくはただ考えていた。

「これは雷水解らいすいかいと云う卦けでな、諸事思うようにはならぬとあります。——」

お蓮は怯おず怯おず三枚の錢から、老人の顔へ視線を移した。

「まずその御親戚とかの若い方かたにも、二度と御遇おあいにはなれそうもないな。」

玄象道人げんしょうどうじんはこう云いながら、また穴錢を一枚ずつ、薄赤い絹に包み始めた。

「では生きては居りませんのでしょうか？」

お蓮は声が震えるのを感じた。「やはりそうか」と云う気もちが、「そんな筈はない」と云う気もちと一しよに、思わず声へ出たのだった。

「生きていられるか、死んでいられるかそれはちと判じ悪いが、

——とにかく御遇いにはなれぬものと御思いなさい。」

「どうしても遇えないでございましょうか？」

お蓮に駄目だめを押された道人は、金欄きんらんの袋の口をしめると、脂あぶら

ぎつた頬のあたりに、ちらりと皮肉らしい表情が浮んだ。

「滄桑そうそうの変へんと云う事もある。この東京が森や林にでもなったら、

御遇いになれぬ事もありますまい。——とまず、卦けにはな、卦に

はちやんと出ています。」

お蓮はここへ来た時よりも、一層心細い気になりながら、高い
けんりよう
見料を払った後、のち　　そうそううち　　々家へ帰つて来た。

その晩彼女は長火鉢の前に、ぼんやりほおづえ頬杖をついたなり、鉄て
つびん

瓶の鳴る音に聞き入っていた。玄象道人の占いは、結局何の解
釈をも与えてくれないのと同様だった。いや、むしろ積極的に、
彼女が密かに抱ひそいていた希望、——たといいかにはかなくとも、
やはり希望には違いない、万一を期する心もちを打ち碎いたのも
同様だった。男は道人がほのめかせたように、實際生きていない
のであろうか？　そう云えば彼女が住んでいた町も、当時は物騒
な最中だった。男はお蓮のいる家へ、うち　　あいかわらず　　不相変通つて来る途中、

何か間違いに遇つたのかも知れない。さもなければ忘れたように、ふつつり来なくなつてしまつたのは、——お蓮は白粉おしろいを刷はいた片頬かたほおに、炭火すみびの火照ほてりを感じながら、いつか火箸もてあそを弄もんでいる彼女自身を見出みいだした。

「金、金、金、——」

灰の上にはそう云う字が、何度も書かれたり消されたりした。

五

「金、金、金、」

そうお蓮れんが書き続けていると、台所にいた雇やとい婆ばあさんが、突

然かすかな叫び声を洩らした。この家では台所と云つても、障子うち一重ひとえ開けさえすれば、すぐにそこが板の間まだつた。

「何？ 婆や。」

「まあ御新ごしんさん。いらしつて御覧なさい。ほんとうに何だと思つたら、——」

お蓮は台所へ出て行つて見た。

竈かまどが幅をとつた板の間には、障子しょうじに映るランプの光が、物静

かな薄暗をつくつていた。婆さんはその薄暗の中に、半はん天てんの腰かがを屈めながら、ちようど今何か白い獣けものを抱だき上げている所だつた。

「猫かい？」

「いえ、犬でございますよ。」

両袖を胸に合せたお蓮は、じつとその犬を覗きこんだ。犬は婆さんに抱かれたまま、水々^{みずみず}しい眼を動かしては、頻^{しきり}に鼻を鳴らしている。

「これは今朝^{けさ}ほど五味溜^{ごみた}めの所に、啼^ないていた犬でございますよ。——どうしてはいつて参りましたかしら。」

「お前はちつとも知らなかったの？」

「はい、その癖ここにさつきから、御茶碗を洗って居りましたんですが——やっぱり人間眼の悪いと申す事は、仕方のないものでございますね。」

婆さんは水口^{みずぐち}の腰障子を開けると、暗い外へ小犬を捨てようとした。

「まあ御待ち、ちよいと私も抱いて見たいから、——」

「御止およしなさいましよ。御召しでもよごれるといけません。」

お蓮は婆さんの止めるのも聞かず、両手にその犬を抱だきとつた。犬は彼女の手の内に、ぶるぶる体を震ふるわせていた。それが一瞬間過去の世界へ、彼女の心をつれて行つた。お蓮はあの賑うちかな家うちにいた時、客の来ない夜は一しよに寝る、白い小犬を飼つていたのだつた。

「可哀かわいそうに、——飼つてやろうかしら。」

婆さんは妙な瞬またたきをした。

「ねえ、婆や。飼つてやろうよ。お前に面倒はかけないから、——」

——

お蓮は犬を板の間まへ下おろすと、無邪気な笑顔を見せながら、もう肴さかなでも探してやる気か、台所の戸棚とだなに手をかけていた。

その翌日から妾宅には、赤い頸環くびわに飾られた犬が、畳の上にいるようになった。

綺麗きれい好きな婆さんは、勿論もちろんこの変化を悦ばなかった。殊に庭へ下りた犬が、泥足のまま上あがつて来なぞすると、一日腹を立てている事もあった。が、ほかに仕事のないお蓮は、子供のように犬を可愛がった。食事の時にも膳ぜんの側には、必ず犬が控えていた。夜はまた彼女の夜着の裾に、まろまろ寝ている犬を見るのが、文字通り毎夜の事だった。

「その時分から私は、嫌だ嫌だと思っていましたよ。何しろ薄暗

いランプの光に、あの白犬が御新造ごしんぞの寝顔をしげしげ見ていた事もあつたんですから、——」

婆さんがかれこれ一年の後のち、私の友人のKと云う医者に、こんな事も話して聞かせたそうである。

六

この小犬に悩まされたものは、雇やとい婆ばあさん一人ではなかつた。牧野まきのも犬が畳の上に、寝そべっているのを見た時には、不快そうに太い眉まゆをひそめた。

「何だい、こいつは？——畜生ちくしょう。あつちへ行け。」

陸軍主計りくぐんしゆけいの軍服を着た牧野は、邪慳じゃけんに犬を足蹴あしげにした。

犬は彼が座敷へ通ると、白い背中の毛を逆立さかだてながら、無性むしように吠ほえ立て始めたのだった。

「お前の犬好きにも呆あきれるぜ。」

晩酌ばんしやくの膳についてからも、牧野はまだ忌々いまいましそうに、じ

ろじろ犬を眺めていた。

「前にもこのくらいなやつを飼っていたじゃないか？」

「ええ、あれもやつぱり白犬でしたわ。」

「そう云えばお前があのだと、何でも別れないと云い出したのにや、随分手こずらされたものだったけ。」

お蓮れんは膝の小犬を撫なでながら、仕方なさそうな微笑を洩らした。

汽船や汽車の旅を続けるのに、犬を連れて行く事が面倒なのは、彼女にもよくわかつていた。が、男とも別れた今、その白犬を後に残して、見ず知らずの他国へ行くのは、どう考えて見ても寂しかった。だからいよいよ立つと云う前夜、彼女は犬を抱き上げては、その鼻に頬をすりつけながら、何度も止めどない啜り泣きを呑みこみ呑みこみしたものだ。……

「あの犬は中々利巧だったが、こいつはどうも莫迦らしいな。第一人相が、——人相じゃない。犬相だが、——犬相が甚だ平凡だよ。」

もう酔のまわった牧野は、初めの不快も忘れたように、刺身なぞを犬に投げてやった。

「あら、あの犬によく似ているじやありませんか？　違うのは鼻の色だけですわ。」

「何、鼻の色が違う？　妙な所がまた違つたものだな。」

「この犬は鼻が黒いでしょう。あの犬は鼻が赭あこうござんしたよ。」

お蓮は牧野の酌をしながら、前に飼つていた犬の鼻が、はつきりと眼の前に見えるような気がした。それは始終よだれ涎に濡れた、ちようど子持ちの乳房ちぶさのように、鳶とび色の斑ふちがある鼻づらだった。

「へええ、して見ると鼻の赭あかい方が、犬では美人の相そうなのかも知れない。」

「美男びなんですよ、あの犬は。これは黒いから、醜男ぶおとこですわね。」

「男かい、二匹とも。ここの家うちへ来る男は、おればかりかと思つ

たが、——こりやちと怪しからんな。」

牧野はお蓮の手を突つきながら、彼一人上機嫌に笑い崩れた。

しかし牧野はいつまでも、その景氣を保つていられなかった。

犬は彼等が床へはいると、古襖ふるぶすまひとえ一重隔てた向うに、何度も悲

しそうな声を立てた。のみならずしまいにはその襖へ、がりがり

前足の爪をかけた。牧野は深夜のランプの光に、妙な苦笑くしょうを浮

べながら、とうとうお蓮へ声をかけた。

「おい、そこを開けてやれよ。」

が、彼女が襖を開けると、犬は存外ゆつくりと、二人の枕もとへはいって来た。そうして白い影のように、そこへ腹を落着けたなり、じつと彼等を眺め出した。

お蓮は何だかその眼つきが、人のような気がしてならなかった。

七

それから二三日経ったある夜、お蓮れんは本宅を抜けて来た牧野まきのと、近所の寄席よせへ出かけて行つた。

手品てじな、劍舞けんぶ、幻燈げんとう、大神樂だいかぐら——そう云う物ばかりかかつて

いた寄席は、身動きも出来ないほど大入りおおいだった。二人はしばらく

く待たされた後のち、やつと高座こうざには遠い所へ、窮きゆう屈くつな腰おろを下す

事が出来た。彼等がそこへ坐つた時、あたりの客は云い合わせた

ように、丸鬚まるまげに結ゆつたお蓮の姿へ、物珍しそうな視線を送つた。

彼女にはそれが晴がましくもあれば、同時にまた何故か寂しくもあつた。

高座には明るい吊ランプの下に、白い鉢巻をした男が、長い抜き身を振りまわしていた。そうして樂屋からは朗々と、「踏み破る千山万岳の煙」とか云う、詩をうたう声が起っていた。お蓮にはその劍舞は勿論、詩吟も退屈なばかりだった。が、牧野は巻煙草へ火をつけながら、面白そうにそれを眺めていた。

劍舞の次は幻燈だった。高座に下した幕の上には、日清戦争の光景が、いろいろ映つたり消えたりした。大きな水

柱を揚げながら、「定遠」の沈没する所もあつた。敵の赤兎を抱いた樋口大尉が、突撃を指揮する所もあつた。大勢の客はそ

の画えの中に、たまたま日章旗が現れなぞすると、必ず盛な喝かつさい采を送った。中には「帝国万歳」と、頓狂な声を出すものもあつた。しかし実戦に臨んで来た牧野は、そう云う連中とは没交渉に、ただにやにやと笑つていた。

「戦争もあの通りだと、楽らくなもんだが、——」

彼は牛ニユーチャン 荘

の激戦の画を見ながら、半ば近所へも聞かせるよ

うに、こうお蓮へ話しかけた。が、彼女は不相あいかわらず変、熱心に幕へ眼をやつたまま、かすかに頷うなずいたばかりだった。それは勿論どん

な画でも、幻燈が珍しい彼女にとっては、興味があつたのに違ひ

なかつた。しかしそのほかにも画面の景色は、——雪の積つた城じ

楼ようろう

の屋根だの、

枯かれやなぎ 柳

に繋つないだ

兎うさぎ 馬うまだの、

辮べんぱつ髪を垂

れた支那兵だのは、特に彼女を動かすべき理由も持っていたのだ
 った。

寄席がはねたのは十時だった。二人は肩を並べながら、しもう
 た家ばかり続いている、人気のない町を歩いて来た。町の上には
 半輪の月が、霜の下りた家々の屋根へ、寒い光を流していた。牧
 野はその光の中へ、時々巻煙草まきたばこの煙を吹いては、さつきの剣舞
 でも頭にあるのか、

「鞭声べんせい 肅々しゆくしゆく 夜河を渡る」なぞと、古臭い詩の句を微吟びぎんした
 りした。

所が横町よこちょうを一つ曲ると、突然お蓮は慍おびえたように、牧野の
 外套がいとうの袖を引いた。

「びつくりさせるぜ。何だ？」

彼はまだ足を止めずに、お蓮の方を振り返った。

「誰か呼んでいるようですもの。」

お蓮は彼に寄り添いながら、気味の悪そうな眼つきをしていた。

「呼んでいる？」

牧野は思わず足を止めると、ちよいと耳を澄ませて見た。が、

寂しい往来には、犬の吠える声さえ聞えなかった。

「空^{そらみみ}耳だよ。何が呼んでなんぞいるものか。」

「気のせいですかしら。」

「あんな幻燈を見たからじゃないか？」

八

寄席^{よせ}へ行つた翌朝^{よくあさ}だつた。お蓮^{れん}は房楊枝^{ふさようじ}を啣^{くわ}えながら、顔を洗^らいに縁側^{えんがわ}へ行つた。縁側^{えんがわ}にはもういつもの通り、銅^みの耳^{みだ}

盥^{らい}に湯を汲んだのが、鉢前^{はちまえ}の前に置いてあつた。

冬枯^{ふゆがれ}の庭は寂しかった。庭の向うに続いた景色も、曇天を映した川の水と一しよに、荒涼^{わうりやう}を極めたものだつた。が、その景色が眼^めにはいると、お蓮^{れん}は嗽^{うが}いを使いがら、今までは全然忘れていた昨夜^{ゆうべ}の夢を思い出した。

それは彼女がたつた一人、暗い藪^{やぶ}だか林^{はやし}だかの中を歩き廻^{まわ}つてゐる夢だつた。彼女は細い路^{ちど}を辿^{たど}りながら、「とうとう私の念^{ねん}り

力が届いた。東京はもう見渡す限り、人氣ひとけのない森に変わっている。きつと今に金きんさんにも、遇う事が出来るのに違いない。」——そんな事を思い続けていた。するとしばらく歩いている内に、大砲の音や小銃の音が、どことも知らず聞え出した。と同時に木々の空が、まるで火事でも映すように、だんだん赤濁りを帯び始めた。「戦争だ。戦争だ。」——彼女はそう思いながら、一生懸命に走ろうとした。が、いくら氣き負おつて見ても、何故なぜか一向走れなかった。……………

お蓮は顔を洗ってしまうと、手水ちょうずを使うために肌はだを脱いだ。その時何か冷たい物が、べたりと彼女の背中に触ふれた。

「しっ！」

彼女は格別驚きもせず、^{なまめ}艶いた眼を後へ^{うしろ}投げた。そこには小犬が尾を振りながら、^{しきり}頻に黒い鼻を舐め廻していた。

九

牧野はその後^{まきの}二三日すると、いつもより早めに妾宅へ、田宮と云う男と遊びに来た。ある有名な御用商人の店へ、番頭格に通^{かよ}っている田宮は、お蓮^{れん}が牧野に^{かこ}囲われるのについても、いろいろ世話をしてくれた人物だった。

「妙なもんじやないか？　こうやって丸^{まる}髷^{まげ}に結^ゆつていると、どうしても昔のお蓮さんとは見えない。」

田宮は明いランプの光に、薄痘痕うすいものある顔を火照ほてらせながら、向い合つた牧野へ盃さかずきをさした。

「ねえ、牧野さん。これが島田しまだに結ゆつていたとか、赤熊しやぐまに結つていたとか云うんなら、こうも違つちや見えまいがね、何しろ以前が以前だから、——」

「おい、おい、ここの婆さんは眼は少し悪いようだが、耳は遠くもないんだからね。」

牧野はそう注意はしても、嬉しそうににやにや笑っていた。

「大丈夫。聞えた所がわかるもんか。——ねえ、お蓮さん。あの時分の事を考えると、まるで夢のようじゃありませんか。」

お蓮は眼を外そらせたまま、膝ひざの上の小犬にからかっていた。

「私も牧野さんに頼まれたから、一度は引き受けて見たようなものの、万一ばれた日にや^{おおごと}大事だと、無事に神戸^{こうべ}へ上がるまでにや、随分これでも気を揉^もみましたぜ。」

「へん、そう云う危い橋なら、渡りつけているだろうに、——」

「冗談云っちゃいけない。人間の密輸入はまだ一度ぎりだ。」

田宮は一盃ぐいとやりながら、わざとらしい^{じゅうめん}渋面をつくつ

て見せた。

「だがお蓮の^{こんにち}今日あるを得たのは、實際君のおかげだよ。」

牧野は太い腕を伸ばして、田宮へ猪口^{ちよく}をさしつけた。

「そう云われると恐れ入るが、とにかくあの時は弱ったよ。おまけにまた乗った船が、ちょうど^{げんかい}玄海へかかったとなると、恐ろ

しいしけを食^{くら}つてね。——ねえ、お蓮さん。」

「ええ、私はもう船も何も、沈んでしまうかと思ひましたよ。」

お蓮は田宮の酌^{しやく}をしながら、やつと話に調子を合わせた。が、

あの船が沈んでいたら、今よりは反^{かえ}つて益^{まし}かも知れない。——そんな事もふと考えられた。

「それがまあこうしていられるんだから、御^{おたが}互^{いさま}様に仕合せでさ

あ。——だがね、牧野さん。お蓮さんに丸鬣^{まるはつ}が似合うようになる
と、もう一度また昔のなりに、返らせて見たい気もしやしないか
？」

「返らせたかつた所が、仕方がないじゃないか？」

「ないがさ、——ないと云えば昔の着物は、一つもこつちへは持

つて来なかつたかい？」

「着物どころか櫛くし簪かんざしまでも、ちゃんと御持参になっている。

いくら僕が止せと云つても、一向いっこう御取上げにならなかつたんだから、——」

牧野はちらりと長火鉢越しに、お蓮の顔へ眼を送った。お蓮はその言葉も聞えないように、鉄瓶のぬるんだのを気にしていた。

「そいつはなおさら都合だ。——どうです？ お蓮さん。その内に一つなりを変えて、御酌を願おうじやありませんか？」

「そうして君も序ついでながら、昔むかし馴染なじみを一人思い出すか。」

「さあ、その昔馴染みと云うやつがね、お蓮さんのように好縹ハオビイ緞チエだと、思い出し甲斐がいもあると云うものだが、——」

田宮は薄痘痕うすいものある顔に、擦くすつたような笑いを浮べながら、すり芋いもを箸はしに搦からんでいた。……

その晩田宮が帰ってから、牧野は何も知らなかったお蓮に、近々陸軍を止め次第、商人になると云う話をした。辞職の許可が出さえすれば、田宮が今使われている、ある名高い御用商人が、すぐに高給で抱えてくれる、——何でもそう云う話だった。

「そうすりやここにいたくとも好いいから、どこか手広うちい家へ引越そうじゃないか？」

牧野はさも疲れたように、火鉢の前へ寝ころんだまま、田宮が土産みやげに持って来たマニラの葉巻を吹かしていた。

「この家うちだって沢山ですよ。婆やと私と二人ぎりですもの。」

お蓮は意地のきたない犬へ、残り物を当てがうのに忙しかつた。いそが

「そうなたら、おれも一しよにいるさ。」

「だって御新造ごしんぞがいるじやありませんか？」

かかあ「鼻かい？ 鼻とも近々別れる筈だよ。」

牧野の口調くちようや顔色では、この意外な消しょうそく息も、満更冗談とは思われなかつた。

「あんまり罪な事をするのは御止しなさいよ。」

「かまうものか。おのれ己に出でて己に返るさ。おれの方ばかり悪いん

じやない。」

牧野は険しい眼けわをしながら、やけに葉巻をすばすばやった。お

蓮は寂しい顔をしたなり、しばらくは何とも答えなかつた。

十

「あの白犬が病みついたのは、——そうそう、田宮の旦那が御見えになった、ちようどその明くる日ですよ。」

お蓮れんに使われていた婆さんは、私の友人のKと云う医者に、この当時の容子ようすを話した。

「大方おおかた食しよく中あたりか何かだったんでしよう。始めは毎日長火鉢の前に、ぼんやり寝ているばかりでしたが、その内に時々どうかすると、畳をよごすようになったんです。御新造ごしんぞは何しろ子供のうちに、可愛がついていらした犬ですから、わざわざ牛乳を取つ

てやったり、宝^{ほうたん}丹を口へ唧^{ふく}ませてやったり、随分大事になさいました。それに不思議はないんです。ないんですが、嫌^{いや}じやありませんか？ 犬の病気が悪くなると、御新造が犬と話をなさるのも、だんだん珍しくなくなつたんです。

「そりや話をなさると云つても、つまりは御新造が犬を相手に、長々と独り語^{ごご}をおつしやるんですが、夜更^{よふ}けにでもその声が聞えて御覧なさい。何だか犬も人間のように、口を利^きいていそうな気がして、あんまり好^よい気はしないもんですよ。それでなくつても一度なぞは、あるからつ風^{かぜ}のひどかつた日に、御使いに行つて歸つて来ると、——その御使いも近所^{うらな}の占^{しや}い者の所へ、犬の病氣を見て貰いに行つたんですが、——御使いに行つて歸つて来ると、

障子しょうじのがたがた云う御座敷に、御新造の話し声が聞えるんでし

よう。こりや旦那様でもいらしたかと思つて、障子の隙間から覗いて見ると、やつぱりそこにはたつた一人、御新造がいらつしやるだけなんです。おまけに風に吹かれた雲が、御日様の前を飛ぶからですが、膝へ犬をのせた御新造の姿が、しつきりなしに明るくなつたり暗くなつたりするじやありませんか？ あんなに氣味の悪かつた事は、この年になつてもまだ二度とは、出つくわした覚えがないくらいですよ。

「ですから犬が死んだ時には、そりや御新造には御氣の毒でしたが、こちらは内ない々ないほつとしたもんです。もつともそれが嬉しかつたのは、犬が粗そそうをするたびに、掃除そうじをしなければならなかつ

た私ばかりじゃありません。旦那様もその事を御聞きになると、
厄介やっかいばら払いをしたと云うように、にやにや笑って御出でになりました。
した。犬ですか？ 犬は何でも、御新造はもとより、私もまだ起
きない内に、鏡きようだい台の前へ仆たおれたまま、青い物を吐いて死んで
いたんです。気がなさそうに長火鉢の前に、寝てばかりいるよう
になつてから、かれこれ半月にもなりましたかしら。……」

ちようど薬研堀やげんぼりの市いちの立つ日、お蓮は大きな鏡台の前に、息
の絶えた犬を見出した。犬は婆さんが話した通り、青い吐物とぶつの流
れた中に、冷たい体を横たえていた。これは彼女もとうの昔に、
覚悟をきめていた事だった。前の犬には生別いきわかれをしたが、今度
の犬には死別しにわかれをした。所詮しよせん犬は飼えないのが、持って生ま

れた因縁いんねんかも知れない。——そんな事がただ彼女の心へ、絶望的な静かさをのしかからせたばかりだった。

お蓮はそこへ坐ったなり、茫然と犬の屍骸しがいを眺めた。それからものう懶い眼を挙げて、寒い鏡の面おもてを眺めた。鏡には畳に仆たおれた犬が、彼女と一しよに映っていた。その犬の影をじつと見ると、お蓮は目まいでも起ったように、突然両手に顔を掩おおった。そうしてかすかな叫び声を洩らした。

鏡の中の犬の屍骸は、いつか黒かるべき鼻の先が、赭あかい色に変っていたのだった。

妾宅の新年は寂しかった。門には竹が立てられたり、座敷には蓬^{ほうらい}菜^{さい}が飾られたりしても、お蓮^{れん}は独り長火鉢の前に、屈^{くつ}托^{たく}らしい頬^ほ杖^{おづえ}については、障子の日影が薄くなるのに、懶^{ものう}い眼ばかり注いでいた。

暮に犬に死なれて以来、ただでさえ浮かない彼女の心は、ややともすると発^{ほつ}作^{さて}的^きな憂鬱に襲われ易かった。彼女は犬の事ばかりか、未^いに^{まだ}わからない男の在りかや、どうかすると顔さえ知らない、牧野^{まきの}の妻の身の上までも、いろいろ思い悩んだりした。と同時にまたその頃から、折々妙な幻覚にも、悩まされるようになり始めた。――

ある時は床へはいつた彼女が、やつと眠に就こうとすると、突然何かがのつたように、夜着の裾がじわりと重くなった。小犬はまだ生きていた時分、彼女の蒲団の上へ来ては、よくごろりと横になった。——ちようどそれと同じように、柔かな重みがかつたのだった。お蓮はすぐに枕から、そつと頭を浮かせて見た。が、そこには搔卷の格子模様が、ランプの光に浮んでいるほかは、何物もいるとは思われなかった。……………

またある時は鏡台の前に、お蓮が髪を直していると、鏡へ映つた彼女の後ろを、ちらりと白い物が通つた。彼女はそれでも氣をとめずに、水々しい鬢を掻き上げていた。するとその白い物は、前とは反対の方向へ、もう一度咄嗟に通り過ぎた。お蓮は櫛を持つ

たまま、とうとう後うしろを振り返った。しかし明あかるい座敷の中には、何も生き物のけはいはなかった。やっぱり眼のせいだったかしら、——そう思いながら、鏡へ向うと、しばらくの後のち白い物は、三度彼女の後うしろを通った。……

またある時は長火鉢の前に、お蓮が独り坐っていると、遠い外おうらいの往来に、彼女の名を呼ぶ声が聞えた。それは門の竹の葉が、ざわめく音に交まじりながら、たった一度聞えたのだった。が、その声は東京へ来ても、始終心にかかっていた男の声に違いなかった。お蓮は息をひそめるように、じつと注意深い耳を澄ませた。その時また往来に、今度は前よりも近ちかぢか々と、なつかしい男の声が聞えた。と思うといつのまにか、それは風に吹き散らされる犬の声

に変わっていた。……

またある時はふと眼がさめると、彼女と一つ床の中に、いない筈の男が眠っていた。迫った額、長い睫毛、——すべてが夜半のランプの光に、寸分も以前と変わらなかった。左の眼尻に黒子があつたが、——そんな事さえ検べて見ても、やはり確かに男だつた。お蓮は不思議に思うよりは、嬉しさに心を躍らせながら、そのまま体も消え入るように、男の頸へすがりついた。しかし眠を破られた男が、うるさそうに何か呟いた声は、意外にも牧野に違いなかった。のみならずお蓮はその刹那に、實際酒臭い牧野の頸へ、しつかり両手をからんでいる彼女自身を見出したのだつた。

しかしそう云う幻覚のほかにも、お蓮の心を擾すような事件は、

現実の世界からも起つて来た。と云うのは松もとれない内に、噂に聞いていた牧野の妻が、突然訪ねて来た事だった。

十二

牧野^{まきの}の妻が訪れたのは、生憎^{あいにく}例の雇^{やとい}婆^{ばあ}さんが、使いに行つてゐる留守^{るす}だった。案内を請う声に驚かされたお蓮^{れん}は、やむを得ず氣のない体を起して、薄暗い玄関へ出かけて行つた。すると北向きの格子戸^{こうしど}が、軒さきの御飾りを透^{すか}せている、——そこにひどく顔色の悪い、眼鏡^{めがね}をかけた女が一人、余り新しくない肩掛をしたまま、俯向^{うつむ}き勝^たに佇^たんでいた。

「どなた様でございますか？」

お蓮はそう尋ねながら、相手の正しょうたい体を直覺しよくたいしていた。そうしてこの根ねの抜けた丸まる髻まげに、小紋こもんの羽織はおりの袖そでを合せた、どこか影の薄い女の顔へ、じつと眼を注いでいた。

「私わたくしは——」

女はちよいとためらった後のち、やはり俯向き勝に話し続けた。

「私わたくしは牧野の家内わたくしでございます。滝たきと云うものでございます。」

今度はお蓮が口ごもった。

「さようでございますか。私わたくしは——」

「いえ、それはもう存じて居ります。牧野が始終御世話になります。私からも御礼を申し上げます。」

女の言葉は穏やかだった。皮肉らしい調子などは、不思議なほどこも罩こもつていかなかった。それだけまたお蓮は何と云つて好よいか、挨あ拶いさつのしように困るのだった。

「つきましては今日こんにちは御年始かたがた、ちと御願いがあつて参りましたんですが、——」

「何でございますか、私に出来る事でございましたら——」

まだ油断をしなかったお蓮は、ほぼその「御願い」もわかりそうな気がした。と同時にそれを切り出された場合、答うべき文句も多そうな気がした。しかし伏目勝ふしめちな牧野の妻が、静しずかに述べ始めた言葉を聞くと、彼女の予想は根本から、間違っていた事が明かになった。

「いえ、御願いと申しました所が、大した事でもございませんが、
——実は近々きんきんに東京中が、森になるそうでございますから、その
節はどうか牧野同様、私も御宅へ御置き下さいまし。御願いと云
うのはこれだけでございます。」

相手はゆつくりこんな事を云った。その容子ようすはまるで彼女の言
葉が、いかに気違いじみているかも、全然気づいていないようだ
った。お蓮は呆気あつけにとられたなり、しばらくはただ外光そむに背いた、
この陰気な女の姿を見つめているよりほかはなかった。

「いかがでございましょう？ 置いて頂けましょうか？」

お蓮は舌が剛こわばったように、何とも返事が出来なかった。いつ
か顔を擡もたげた相手は、細々と冷たい眼を開あきながら、眼鏡めがね越しに

彼女を見つめている、——それがなおさらお蓮には、すべてが一場の悪夢あくむのような、気味の悪い心地を起させるのだった。

「私はもとよりどうなつても、かまわない体でございしますが、万一路頭に迷うような事がありましたは、二人の子供が可哀かわいそうでございます。どうか御面倒でもあなたの御宅へ、お置きなすつて下さいまし。」

牧野の妻はこう云うと、古びた肩掛に顔を隠しながら、突然しくしく泣き始めた。すると何故なぜか黙っていたお蓮も、急に悲しい気がして来た。やつと金きんさんにも遇あえる時が来たのだ、嬉しい。嬉しい。——彼女はそう思いながら、それでも春着の膝の上へ、やはり涙を落している彼女自身を見出みいだしたのだった。

が、何分なんぶんか過ぎ去った後のち、お蓮がふと気がついて見ると、薄暗い北向きの玄関には、いつのまに相手は帰ったのか、誰も人影が見えなかった。

十三

七草ななくさの夜よ、牧野まきのが妾宅へやって来ると、お蓮れんは早速彼の妻が、訪ねて来たいきさつを話して聞かせた。が、牧野は案外平然と、彼女に耳を借したまま、マニラの葉巻ばかり燻くゆらせていた。

「御新造ごしんぞはどうかしているんですよ。」

いつか興奮し出したお蓮は、苛立いらだたしい眉まゆをひそめながら、剛

情に猶も云い続けた。

「今の内に何とかして上げないと、取り返しのつかない事になりますよ。」

「まあ、なつたらなつた時の事さ。」

牧野は葉巻の煙の中から、薄眼に彼女を眺めていた。

「鼻の事なんぞを案じるよりや、お前こそ体に気をつけるが好い。」

何だかこの頃はいつ来て見ても、ふさいでばかりいるじゃないか？

「私はどうなつても好いんですけれど、——」

「好くはないよ。」

お蓮は顔を曇らせたなり、しばらくは口を噤んでいた。が、突

然涙ぐんだ眼を挙げると、

「あなた、後生ごしょうですから、御新造ごしんぞを捨てないで下さい。」と云った。

牧野は呆氣あつけにとられたのか、何とも答を返さなかった。

「後生ですから、ねえ、あなた——」

お蓮は涙を隠すように、黒繻子くろじゆすの襟えりへ顎あごを埋うずめた。

「御新造は世の中にあなた一人が、何よりも大事なんですもの。それを考えて上げなくっちゃ、薄情すぎると云うもんですよ。私の国でも女と云うものは、——」

「好いよ。好いよ。お前の云う事はよくわかったから、そんな心配なんぞはしない方が好いよ。」

葉巻はまきを吸うのも忘れた牧野は、子供を欺だますようにこう云った。

「一体この家うちが陰気だからね、——そうそう、この間はまた犬が死んだりしている。だからお前も気がふさぐんだ。その内にどこか好い所があつたら、早速引越してしまおうじゃないか？　そうして陽気に暮すんだね、——何、もう十日も経たちさえすりや、おれは役人をやめてしまうんだから、——」

お蓮はほとんどその晩中、いくら牧野が慰めても、浮かない顔か色いろを改めなかった。……

「御新造の事では旦那様だんなさまも、随分御心配なすつたもんですが、

——
Kにいろいろ尋きかれた時、婆さんはまた当時の容子ようすをこう話し

たとか云う事だった。

「何しろ今度の御病気は、あの時分にもうきざしていたんですから、やっぱりまあ旦那様始め、御おあきら諦めになるほかはありますまい。現に本宅の御新造が、不意に横網よこあみへ御出でなすった時でも、私が御使いから帰つて見ると、こちらの御新造は御玄関先へ、ぼんやりとただ坐つていらつしやる、——それを眼鏡越しに睨にらみながら、あちらの御新造はまた上ろうともなさらず、悪わるでいねい丁寧な嫌味やみのありつたけを並べて御出でなさる始末しまつなんです。

「そりや御主人が毒づかれるのは、蔭で聞いている私にも、好いい気のするもんじゃありません。けれども私がそこへ出ると、余計まえ事がむずかしいんです。——と云うのは私も四五年前には、御本

宅に使われていたもんですから、あちらの御新造に見つかったが最後、かえ反つて先様の御腹立ちを煽あおる事になるかも知れますまい。そんな事があつては大変ですから、私は御本宅の御新造が、さんざん悪態あくたいを御つきになつた揚句あげく、御帰りになつてしまうまでは、とうとう御玄関の襖ふすまの蔭から、顔を出さずにしまいました。

「ところがこちらの御新造は、私の顔を御覧になると、『婆や、今し方御新造が御見えなすつたよ。私なんぞの所へ来ても、嫌味一つ云わないんだから、あれがほんとうの結構人けっこうじんだろうね。』と、こうおっしゃるじゃありませんか？　そうかと思うと笑いがら、『何でも近々に東京中が、森になるつて云つていたつけ。可哀そうにあの人は、気が少し変なんだよ。』と、そんな事さえ

おっしゃるんですよ。……」

十四

しかしお蓮^{れん}の憂鬱^{うれ}は、二月にはいつて間^まもない頃、やはり本^{ほん}所の松井町^{まついちょう}にある、手広い二階家へ住むようになって、不^{あい}相^{あひ}變^{へん}晴^{せい}れそうな気色^{けしき}はなかった。彼女は婆^きさんとも口^{くち}を利^きかず、大^{たい}抵^{てい}は茶の間^まにたった一人、鉄瓶^{てつびん}のたぎりを聞き暮^くしていた。するとそこへ移^{うつ}つてから、まだ一週間も経^へたないある夜、もうどこかで飲^のんだ田宮^{たみや}が、ふらりと妾宅^{めかけ}へ遊びに來た。ちようど一杯^{いっぱい}始めていた牧野^{まきの}は、この飲^のみ仲間の顔を見ると、早速手にあつ

た猪口ちよくをさした。田宮はその猪口を貰う前に、襯衣シャツを覗かせた懷ふところから、赤い缶詰かんづめを一つ出した。そうしてお蓮の酌を受けながら、「これは御土産おみやげです。お蓮夫人。これはあなたへ御土産です。」と云った。

「何だい、これは？」

牧野はお蓮が礼を云う間あいだに、その缶詰を取り上げて見た。

「貼紙ペーパーを見給え。臘腦獸おつとせいだよ。臘腦獸の缶詰さ。——あなた

は氣のふさぐのが病だつて云うから、これを一つ献上します。産前、産後、婦人病一切いっさいによろしい。——これは僕の友だちに聞いた能書きのうがだがね、そいつがやり始めた缶詰だよ。」

田宮は唇を嘗なめまわしては、彼等二人を見比べていた。

「食えるかい、お前、おつとせい 膾膾おつとせいなんぞが？」

お蓮は牧野にこう云われても、無理にちよいと口元へ、微笑を見せたばかりだった。が、田宮は手を振りながら、すぐにその答えを引き受けた。

「大丈夫。大丈夫だとも。——ねえ、お蓮さん。この膾膾おつとせいと云うやつは、おす牝が一匹いる所には、めす牝が百匹もくつついている。まあ人間にすると、牧野さんと云う所です。そう云えば顔も似ていますな。だからです。だから一つ牧野さんだと思つて、——可愛い牧野さんだと思つておあが御上んなさい。」

「何を云っているんだ。」

牧野はやむを得ずくしょう苦笑した。

「牝が一匹いる所に、——ねえ、牧野さん、君によく似ているだろう。」

田宮は薄痘痕うすいものある顔に、一ぱいの笑いを浮べたなり、委細いさいかまわずしゃべり続けた。

「今日僕の友だちに、——この缶詰屋に聞いたんだが、膾膾おつとせ獣と云うやつは、牝同志が牝を取り合うと、——そうそう膾膾おつとせ獣の話よりや、今夜は一つお蓮さんに、昔のなりを見せて貰もらうんだつた。どうですか？ お蓮さん。今こそお蓮さんなんぞと云っているが、お蓮さんとは世を忍ぶ仮の名さ。ここは一番音羽屋おとわやで行きたいね。お蓮さんとは——」

「おい、おい、牝を取り合うとどうするんだ？ その方をまず伺

いたいね。」

迷惑らしい顔をした牧野は、やつともう一度膾炙おととせ獣の話へ、危険な話題を一転させた。が、その結果は必ずしも、彼が希望していたような、都合つごうの好いものではなさそうだった。

「牝を取り合うとか？ 牝を取り合うと、大喧嘩をするんだそう
だ。その代りだね、その代り正々堂々とやる。君のように暗打ち
なんぞは食わせない。いや、こりや失礼。禁句禁句金看板きんくきんくきんかんばんの甚
んくろう
九郎だつけ。——お蓮さん。一つ、献じましょう。」

田宮は色を変えた牧野に、ちらりと顔を睨にらまれると、てれ隠し
にお蓮さかずきへ盃をさした。しかしお蓮は無気味ぶきみなほど、じつと彼を見
つめたぎり、手も出そうとはしなかった。

十五

お蓮^{れん}が床^{とこ}を抜け出したのは、その夜の三時過ぎだった。彼女は二階の寢間^{ねま}を後に、そつと暗い梯子^{はしご}を下りると、手さぐりに鏡台の前へ行つた。そうしてその抽斗^{ひきだし}から、剃刀^{かみそり}の箱を取り出した。

「^{まきの}牧野め。牧野の畜生め。」

お蓮はそう呟^{つぶや}きながら、静に箱の中の物を抜いた。その拍子に剃刀^にの匀^{おい}が、磨^とぎ澄ました鋼^{はがね}の匀^{おい}が、かすかに彼女の鼻を打った。いつか彼女の心の中には、狂暴な野性が動いていた。それは彼

女が身を売るまでに、邪慳じゃけんな継母まははとの争いから、荒むますさまに
 任せた野性だった。白粉おしろいが地肌じはだを隠したように、この数年間の
 生活が押し隠していた野性だった。……

「牧野め。鬼め。二度の日の目は見せないから、——」

お蓮は派手な長襦袢ながじゅばんの袖に、一挺の剃刀おおを蔽おほつたなり、鏡台
 の前に立ち上った。

すると突然かすかな声が、どこからか彼女の耳へはいった。

「御止およし。御止し。」

彼女は思わず息を呑んだ。が、声だと思ったのは、時計の振子ふりこ
 が暗い中に、秒を刻んでいる音らしかった。

「御止し。御止し。御止し。」

しかし梯子を上りかけると、声はもう一度お蓮を捉えた。彼女はそこへ立ち止りながら、茶の間の暗闇を透かして見た。

「誰だい？」

「私。私だ。私。」

声は彼女と仲が良かった、朋輩の一人に違いなかった。

「一枝さんかい？」

「ああ、私。」

「久しぶりだねえ。お前さんは今どこにいるの？」

お蓮はいつか長火鉢の前へ、昼間のように坐っていた。

「御止し。御止しよ。」

声は彼女の問に答えず、何度も同じ事を繰返すのだった。

「何故^{なぜ}またお前さんまでが止めるのさ？　殺したって好いじゃないか？」

「お止し。生きているもの。生きているよ。」

「生きている？　誰が？」

そこに長い沈黙があつた。時計はその沈黙の中にも、休みない振子^{ふりこ}を鳴らしていた。

「誰が生きているのさ？」

しばらく無言^{むごん}が続いた後^{のち}、お蓮がこう問い直すと、声はやつと彼女の耳に、懐しい名前を囁^{ささや}いてくれた。

「金^{きん}——金さん。金さん。」

「ほんとうかい？　ほんとうなら嬉しいけれど、——」

お蓮は頼ほおづえ杖をついたまま、物思わしそうな眠つきになった。

「だって金きんさんが生きているんなら、私に会いに来そうなもんじやないか？」

「来るよ。来るとき。」

「来るって？ いつ？」

「明日。あした 弥勒寺みろくじへ会いに来るとき。弥勒寺へ。あした 明日の晩。」

「弥勒寺って、弥勒寺橋だろうねえ。」

「弥勒寺橋へね。夜来る。来るとき。」

それぎり声は聞こえなくなった。が、長襦袢ながじゅばん一つのお蓮は、

夜明前の寒さも知らないように、長い間あいだじつと坐っていた。

十六

お蓮^{れん}は翌^{よく}日^{じつ}の午過^{ひる}ぎまでも、二階の寢室を離れなかった。が、四時頃やつと床^{とこ}を出ると、いつもより念入りに化粧をした。それから芝居でも見に行くように、上着も下着もことごとく一番好^よい着物を着始めた。

「おい、おい、何だつてまたそんなにめかすんだい？」

その日は一日店へも行かず、妾宅にごろごろしていた牧野^{まきの}は、風俗画報^{ふうぞくがほう}を拡げながら、不審そうに彼女へ声をかけた。

「ちよいと行く所がありますから、——」

お蓮は冷然と鏡台の前に、鹿^かの子^この帯上げを結んでいた。

「どこへ？」

「弥勒寺橋まで行けばいいんです。」

「弥勒寺橋？」

牧野はそろそろ訝るよりも、不安になって来たらしかった。それがお蓮には何とも云えない、愉快な心もちを唆るのだった。

「弥勒寺橋に何の用があるんだい？」

「何の用ですか、——」

彼女はちらりと牧野の顔へ、侮蔑の眼の色を送りながら、静に帯止めの金物を合せた。

「それでも安心して下さい。身なんぞ投げはしませんから、——」

「莫迦な事を云うな。」

牧野はばかりと畳の上へ、風俗画報を抛^{ほう}り出すと、忌々^{いまいま}しそうに舌打ちをした。……

「かれこれその晩の七時頃だそうだ。――」

今までの事情を話した後、^{のちわたくし}私の友人のKと云う医者は、徐^{おもむろ}にこの言葉を続けた。

「お蓮は牧野が止めるのも聞かず、たった一人家^{うち}を出て行つた。何しろ婆さんなぞが心配して、いくら一しよに行きたいと云つても、当人がまるで子供のうちに、一人にしなければ死んでしまふと、駄々^{だだ}をこねるんだから仕方がない。が、勿論お蓮一人、出してやれたもんじやないから、そこは牧野が見え隠れに、ついて行く事にしたんだそうだ。」

「ところが外へ出て見ると、その晩はちょうど弥勒寺橋の近くに、
薬師やくしの縁日えんにちが立っている。だから二ふたつ目の往来おうらいは、いくら寒
い時分でも、押し合おわなはいばかりの人通りだ。これはお蓮の跡を
つけるには、都合つごうが好よかつたのに違ちがひない。牧野がすぐ後うしろを歩あき
ながら、とうとう相手に氣きづかれなかつたのも、畢ひつきよう竟ようは縁日
の御蔭なんだ。

「往来にはずっと両側えんにちあきんどに、縁日商人が並んでいる。そのカン
テラやランプの明りに、飴屋あめやの渦巻の看板だの豆屋の赤い日傘だ
のが、右にも左にもちらつくんだ。が、お蓮はそんな物には、全
然側目わきめもふらないらしい。ただ心もち俯向うつむいたなり、さつさと人
ごみを縫ぬって行くんだ。何でも遅れずに歩くのは、牧野にも骨が

折れたそうだから、余程先を急いでいたんだろう。

「その内に弥勒寺橋の袂へ来ると、お蓮はやつと足を止めて、茫

然とあたりを見廻したそうだ。あすこには河岸へ曲つた所に、植

木屋ばかりが続いている。どうせ縁日物だから、大した植木が

ある訳じゃないが、ともかくも松とか檜とかが、ここだけは人

足の疎らな通りに、水々しい枝葉を茂らしているんだ。

「こんな所へ来たはいいが、一体どうする気なんだろう？——牧

野はそう疑いながら、しばらくは橋づめの電柱の蔭に、妾の容子

を窺っていた。が、お蓮は不相変、ぼんやりそこに佇んだまま、

植木の並んだのを眺めている。そこで牧野は相手の後へ、忍び足

にそつと近よつて見た。するとお蓮は嬉しそうに、何度もこう云

う独り語を呟ごつぶやいてたと云うじゃないか？——『森になったんだねえ。とうとう東京も森になったんだねえ。』………

十七

「それだけならばまだ好よいが、——」

Kはさらに話し続けた。

「そこへ雪のような小犬が一匹、偶然人ごみを抜けて来ると、お蓮れんはいきなり両手を伸ばして、その白犬を抱だき上げたそうだ。そうして何を云うかと思えば、『お前も来てくれたのかい？ 随分ここまでは遠かったろう。何しろ途中には山もあれば、大きな海

もあるんだからね。ほんとうにお前に別れてから、一日も泣かずにいた事はないよ。お前の代りに飼った犬には、この間死なれてしまうしき。』なぞと、夢のような事をしゃべり出すんだ。が、小犬は人懐つこいのか、啼きもしなければ噛みつきもしない。ただ鼻だけ鳴らしては、お蓮の手や頬を舐め廻すんだ。

「こうなると見てはいられないから、牧野はどうとう顔を出したが、お蓮は何と云つても、金さんがここへ来るまでは、決して家へは帰らないと云う。その内に縁日の事だから、すぐにまわりへは人だかりが出来る。中には『やあ、別嬪の気違いだ』と、大きな声を出すやつさえあるんだ。しかし犬好きなお蓮には、久しぶりに犬を抱いたのが、少しは気休めになったんだろう。ややし

ばらく押し問答をした後、^{のち}ともかくも牧野の云う通り一応は家へ
帰る事に、やつと話が片附いたんだ。が、いよいよ帰るとなつて
も、^{やじうま}野次馬は容易に退くもんじやない。お蓮もまたどうかすると、
^{みろくじぼし}弥勒寺橋の方へ引返そうとする。それを宥めたり^{なだ}賺したりしな
がら、^{まついちよう}松井町の家へつれて来た時には、さすがに牧野も^{がいつう}外套
の下が、すっかり汗になつていたそうだ。……」

^{のぼ}お蓮は家へ^{いえ}帰つて来ると、白い子犬を抱いたなり、二階の寢室
へ上つて行つた。そうして真暗な座敷の中へ、そつとこの憐れな
動物を放した。犬は小さな尾を振りながら、嬉しうにそこらを
歩き廻つた。それは以前飼つていた時、彼女の寢台^{ねだい}から石畳の上
へ、飛び出したのと同じ歩きぶりだった。

「おや、――」

座敷の暗いのを思い出したお蓮は、不思議そうにあたりを見廻した。するといつか天井からは、火をともした瑠璃燈るりとうが一つ、彼女の真上に吊下つりさがっていた。

「まあ、綺麗だ事。まるで昔に返ったようだねえ。」

彼女はしばらくはうつとりと、燦きらびやかな燈火ともしびを眺めていた。が、やがてその光に、彼女自身の姿を見ると、悲しそうに二三度頭かしらを振った。

「私は昔の蕙蓮けいれんじゃない。今はお蓮と云う日本人にほんじんだもの。金きんさんも会いに來ない筈だ。けれども金さんさえ來てくれれば、――

――

ふと頭を擡かしらげたお蓮は、もう一度驚きの声を洩もらした。見ると小犬のいた所には、横になつた支那人が一人、四角な枕ひじへ肘ひじをのせながら、悠々と鴉片あへんを燻くゆらせている！ 迫つた額、長い睫毛まつげ、それから左の目尻めじりの黒子ほくろ。――すべてが金に違いなかつた。のみならず彼はお蓮を見ると、やはり煙管きせるを啣くわえたまま、昔の通り涼しい眼に、ちらりと微笑を浮べたではないか？

「御覧。東京はもうあの通り、どこを見ても森ばかりだよ。」
なるほど

成程二階の亜字欄あじらんの外には、見慣ない樹木が枝を張つた上に、刺繡ぬいとりの模様ようようにありそうな鳥が、何羽も気軽きえさそうに囀さえずっている、

――そんな景色を眺めながら、お蓮は懐しい金の側に、一夜中いちやじゅう恍惚こうこつと坐つていた。……

「それから一日か二日すると、お蓮——本名は孟蕙蓮もうけいれんは、もうこのK脳病院の患者かんじやの一人になっていたんだ。何でも日清戦争中は、威海衛いかいえいのある妓館ぎかんとかに、客を取っていた女だそうだが、——何、どんな女だった？ 待ち給え。ここに写真があるから。」

Kが見せた古写真には、寂しい支那服の女が一人、白犬と一しよに映っていた。

「この病院へ来た当座は、誰が何と云った所が、決して支那服を脱がなかったもんだ。おまけにその犬が側にいないと、金さん金さんと喚わめき立てるじゃないか？ 考えれば牧野も可哀そうな男さ。蕙蓮けいれんを妾めかけにしたと云つても、帝国軍人の片破かたわれたるものが、戦争後すぐに敵国人を内地へつれこもうと云うんだから、人知れな

い苦勞が多かつたろう。——え、金はどうした？ そんな事は尋きくだけ野暮だよ。僕は犬が死んだのさえ、病氣かどうかと疑っているんだ。」

（大正九年十二月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集⁴」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

奇怪な再会

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>